

105 国際ロータリー元会長・精神科医 向笠廣次について

川 瀧 眞 人

川瀧整形外科病院

向笠廣次は1911年(明治44年)11月9日に久留米市で生まれた。もともとは豊津(福岡県京都郡)の出身である。廣次の父は1等軍医(大尉)であった関係で廣次も一緒にあちこちと転居している。小倉からソウル、福島、水戸、久留米へと転居し、中学校は東京神田の私立東京中学校に入学した。4年生の時に山形高等学校(現在の山形大学)の受験に合格して入学している。1930年、高校生活最後の夏の19歳の時に父親が50歳で夭折した。その後、体調不良になり、非常に困難で辛い青春時代を過ごしていた。1931年、九州大学医学部の一次試験に合格するも、胸部レントゲン検査で異常が見つかり2年間の浪人生活を余儀なくされた。1933年4月、九州大学医学部に入学した後も結核性胸膜炎で1年間休学している。このころがもっとも厳しく辛い苦難の青春時代であったと思われる。その苦しい青春時代を立ち直らせたのがヨットである。あの時代、ヨットなどに乗る人などほとんどいなかったそうであるが、廣次は何とかヨットをやりたいと九州大学にヨット部を創設し、ヨットを操船することで強靱な体力と精神力を回復した。そして、そのヨットを通じて、生涯の伴侶となる喜代子夫人を獲得し、学生結婚をしている。1946年、35歳の時に中津市の平田医院の一部を借りて精神科を開業した。廣次は医学者としても大変な功績を残している。1939年、精神病の治療法として世界で最初の電気ショック療法を開発・発表している。この時の発表論文の原本に掲載された電気ショック1号器が、現在、米国精神医学会のニューヨーク記念館に保存されている。廣次のもう一つの功績は、嫌酒薬・シアナマイドを創案したことである。これを酒と一緒に飲むと非常に気持ちが悪くなって、それ以上お酒が飲めないようになるといわれている。この薬は、先生の実弟で現在、市内の大貞病院の会長をしている向笠寛氏と一緒に開発して吉富製薬で創薬され、多くのアルコール中毒患者を救った。このように医学界においても歴史に残る業績を挙げられた。1957年4月3日、中津ロータリークラブに入会と同時に幹事を3年間、3回も務めた。1967年7月には第370地区ガバナーに就任し、1970年7月にはRI(国際ロータリー)の広報諮問委員、1974年7月には在日本ロータリー財団推進諮問委員長、1977年7月にはRIアジア地域諮問委員、1978年7月にRI理事となり、そして1982年、5月16日、ボカラトンにおける理事会および国際協議会について次年度のRI会長に指名された。この時、向笠廣次先生はRI会長ノミニーとしてガバナーノミニー夫妻に対して「人類は共通の先祖から発生しておりその意味では皆さん方は全員従兄弟と一緒になのです。さあ、立ち上がって周囲の友人と心からの握手をして『マイカズン!』と声をかけましょう」と呼びかけたところ、会場は忽ち熱気に溢れ「マイカズン!マイカズン!」と連呼の輪が広がり、出席者全員が総立ちして握手をし始めて大歓声が湧き、しばらくの間、興奮のるつぼだったという。1982年6月6~9日、ダラスにてロータリー国際大会が開催されたが、その大会で1982~1983年度のRI会長に就任した。日本人としては東ヶ崎潔氏に次ぐ2番目のRI会長であった。演説のテーマは『人類はひとつ、世界中に友情の橋をかけよう』というもので前述のような内容で講演をした。そして97ヶ国14,015人の出席者が大いなる感動と拍手をもって、新しい会長を迎え讃えた。全世界44カ国、全旅程15万kmを公式訪問したということである。この間持病の関節リウマチが増悪し更なる困難が待ち受けていた。